

① 申請者	越前町、瀬戸市、常滑市、 甲賀市、丹波篠山市、◎備前市	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
きつと恋する六古窯 ー日本生まれ日本育ちのやきもの産地ー			
④ ストーリーの概要（200字程度）			
土管坂（常滑市） 煉瓦煙突の景観（備前市） 瀬戸、越前、常滑、信楽、丹波、備前のやきものは「日本六古窯」と呼ばれ、縄文から続いた世界に誇る日本古来の技術を継承している、日本生まれ日本育ちの、生粋のやきもの産地である。 中世から今も連綿とやきものづくりが続くまちは、丘陵地に残る大小様々の窯跡や工房へ続く細い坂道が迷路のように入り組んでいる。恋しい人を探すように煙突の煙を目印に陶片や窯道具を利用した堀沿いに進めば、「わび・さび」の世界へと自然と誘い込まれ、時空を超えてセピア調の日本の原風景に出会うことができる。			

市町村の位置図（全国地図）



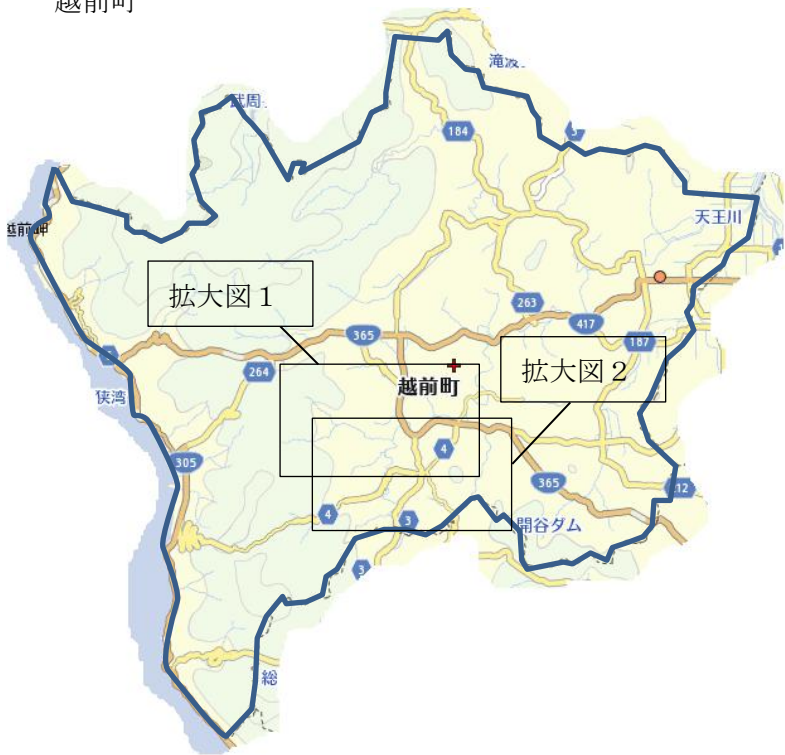
市町村の位置図（越前町）

福井県



- ①県の位置図
 - ②市の位置図
 - ③構成文化財の位置図
- の順に掲載したいと思います。

越前町



「1-7 越前窯跡群」は拡大図 1・2 の地域内に点在。

構成文化財の位置図（越前町）

拡大図 1

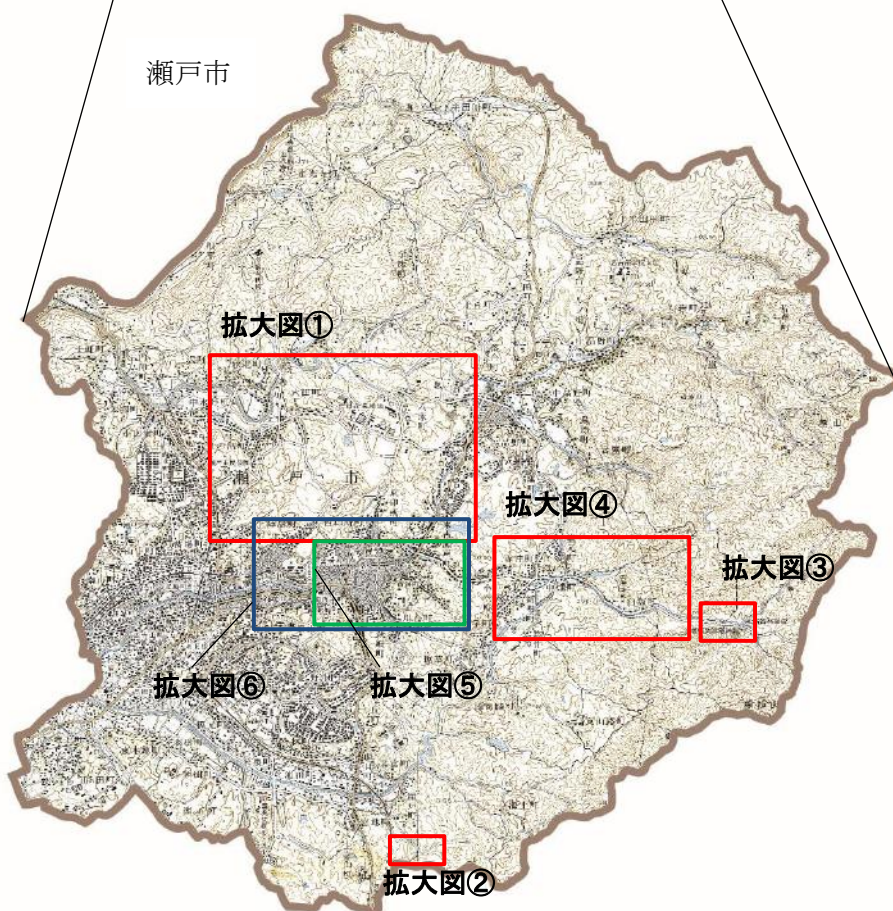
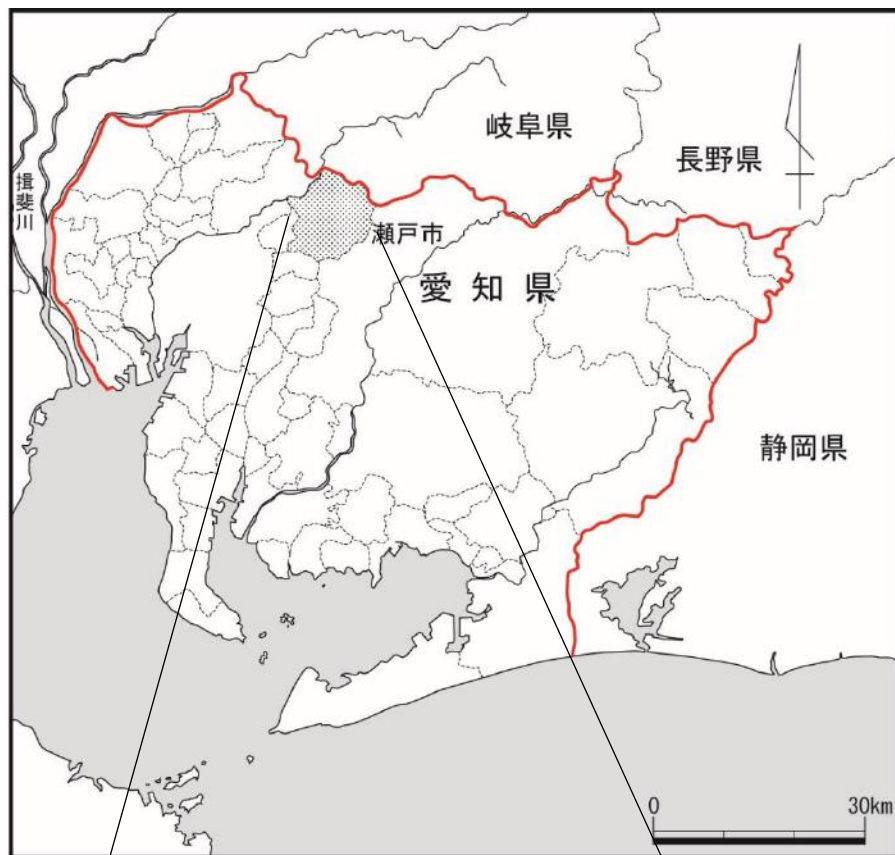


拡大図 2



市町村の位置図（瀬戸市）

愛知県



構成文化財の位置図（瀬戸市）

※2-6 は個人蔵のため未記載

拡大図①



拡大図②

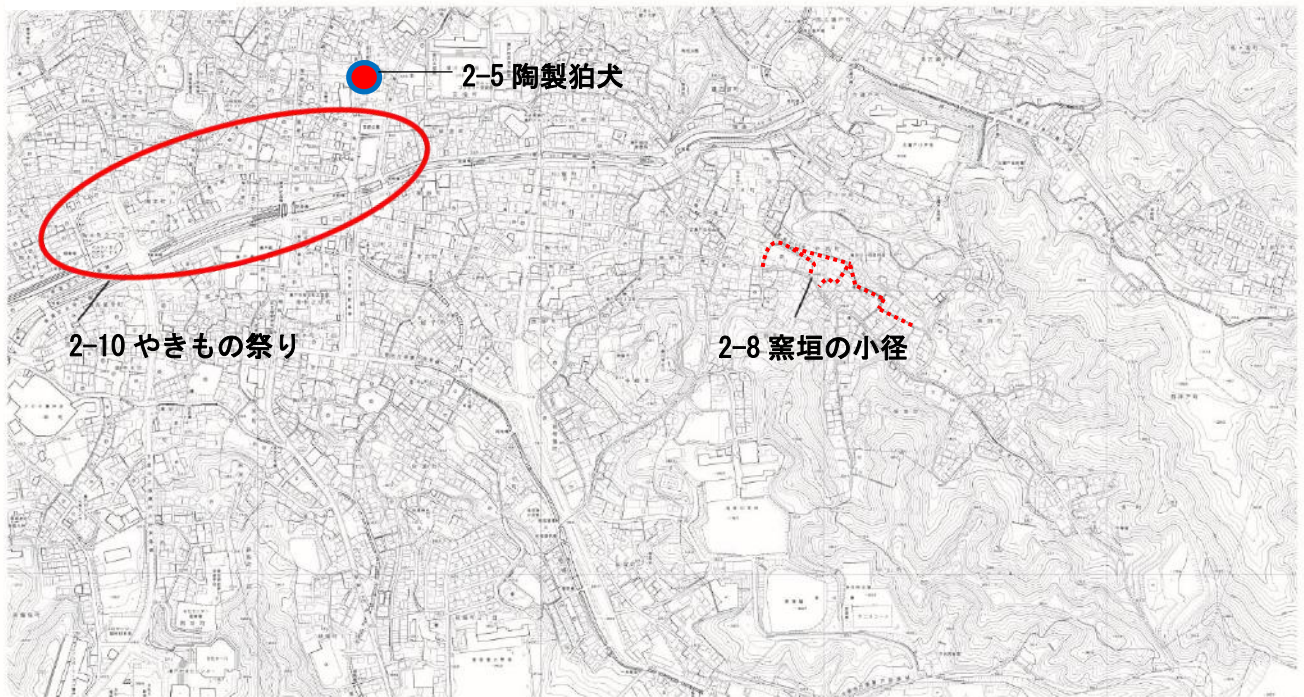


2-9 赤津瓦
(集中地区)

2-4 瀬戸窯跡
(瓶子陶器窯跡)

構成文化財の位置図（瀬戸市）

拡大図⑤



拡大図⑥



市町村の位置図 (常滑市)



拡大図 1

拡大図 2

構成文化財の位置図（常滑市）

拡大図 1



拡大図 2

常滑市陶磁器会館

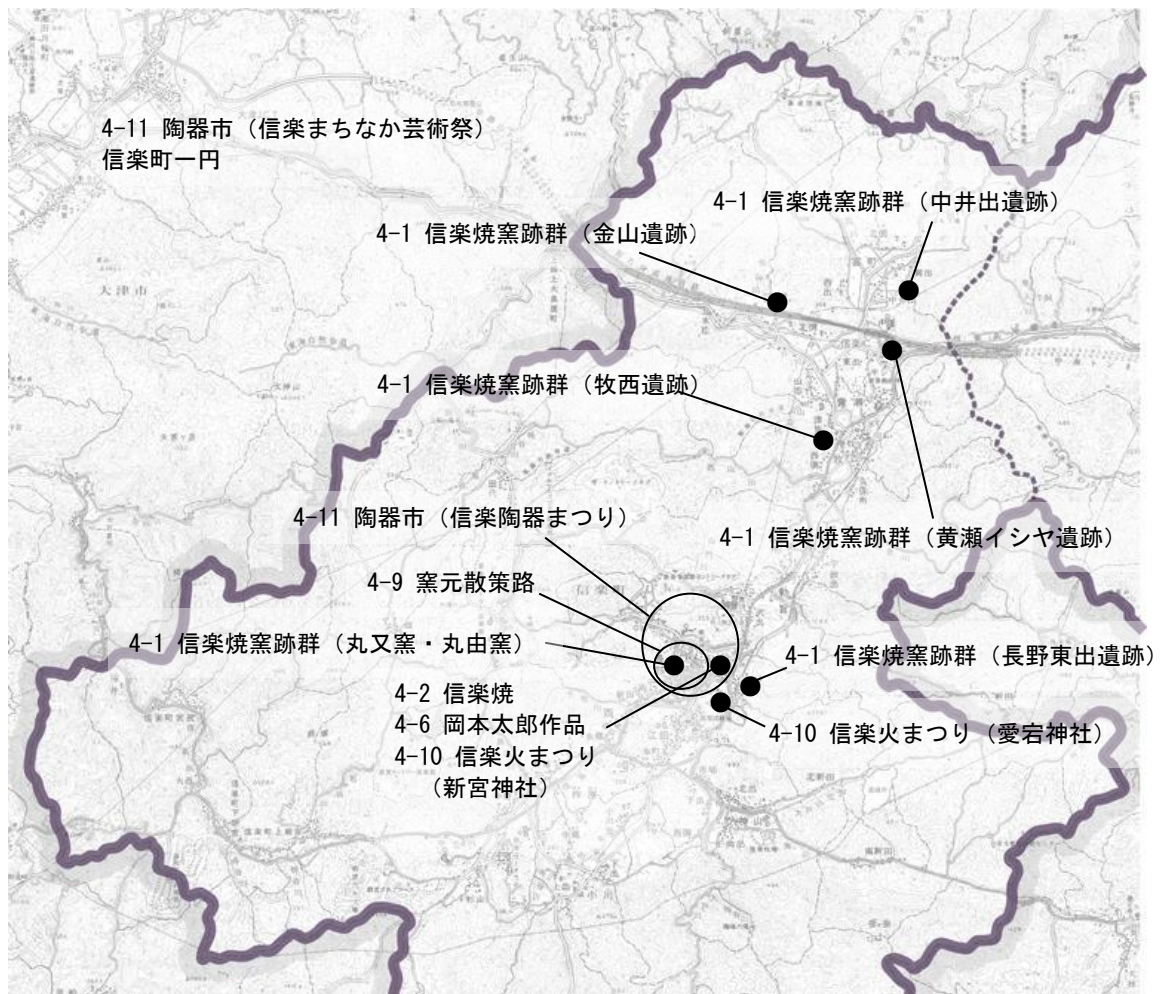
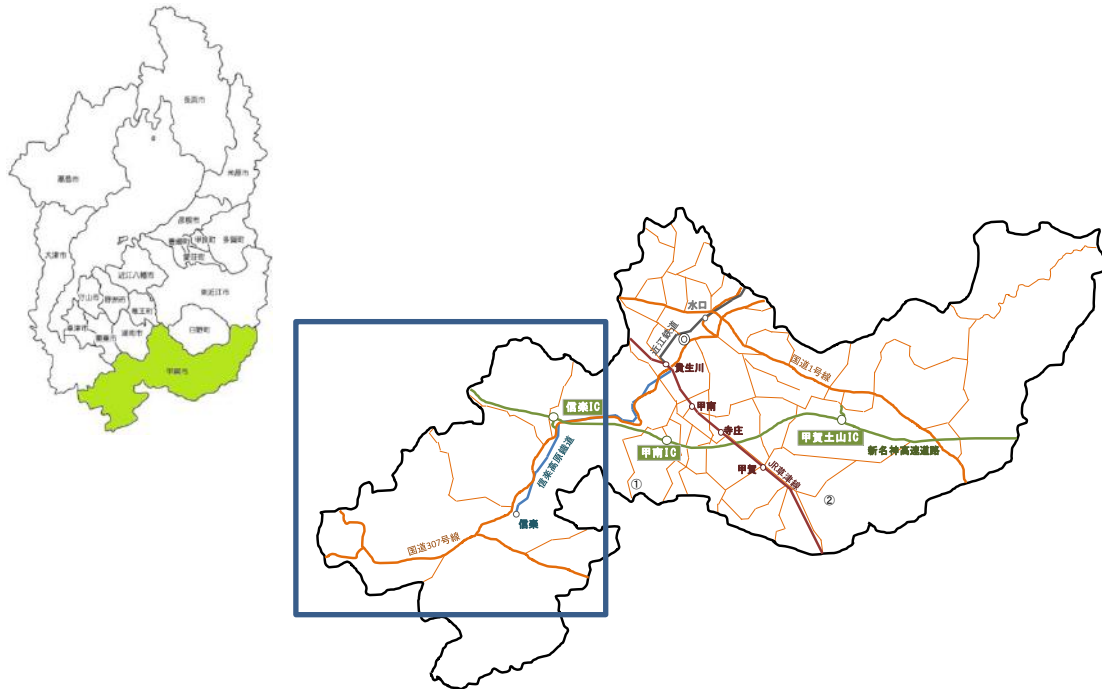
3-1 やきものの散歩道の文化的景観



3-8 窯のある広場・資料館

構成文化財の位置図（甲賀市）

※4-7 古琵琶湖層は市内全域

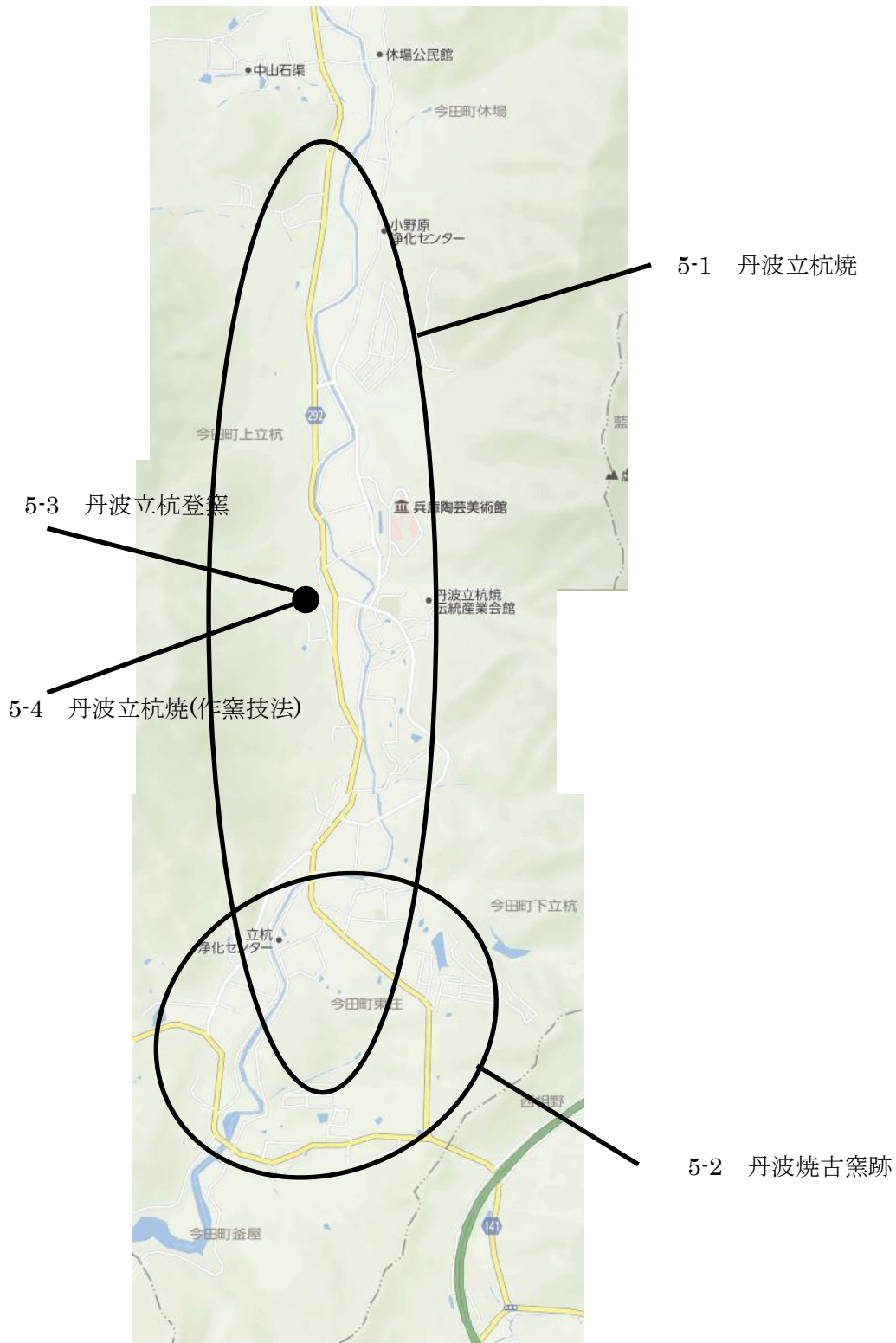


市町村の位置図（丹波篠山市）



構成文化財の位置図（丹波篠山市）

ア 今田地区

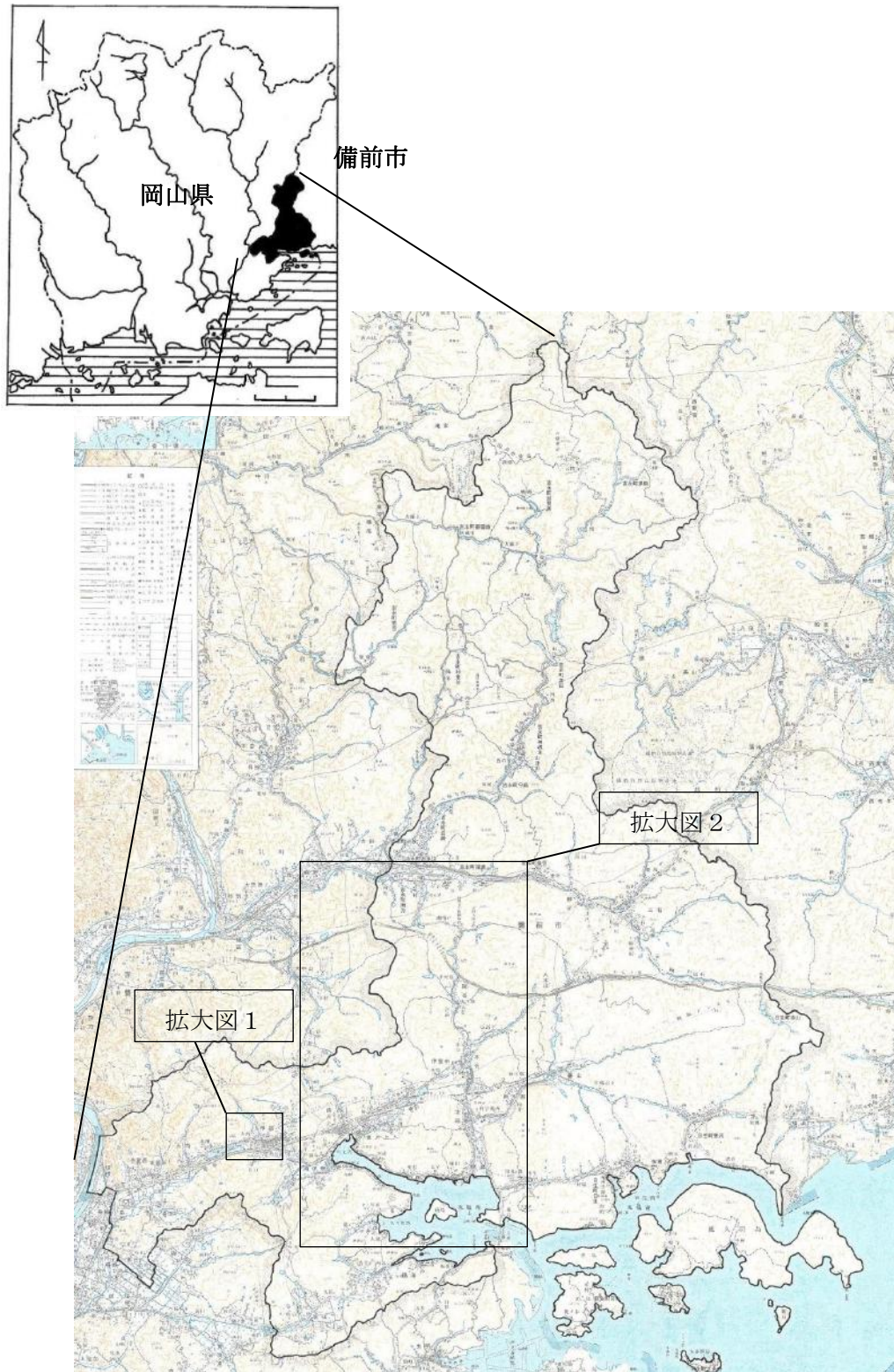


イ 城下町地区



5-5 古丹波コレクション

市町村の位置図（備前市）



構成文化財の位置図

(拡大図 1)



(拡大図 2)



ストーリー

◆六古窯と日本人の心

数百年から千年を超える六古窯。すなわち、施釉陶器の瀬戸^{せと}と焼締陶器の越前^{えちぜん}・常滑^{とこなめ}・信楽^{しがらき}・丹波^{たんば}・備前^{びぜん}である。

中世は平安時代の公家政権から武家政治へと段階的に移行したことに加え、民衆の力が台頭した時代である。そのため、東は静岡県から南は三重県、北は岐阜県高山市近くまで山茶碗窯ができていく。その一大勢力が常滑焼である。常滑の影響を大きく受けて越前焼は平安時代末期の12世紀後半に、丹波焼は鎌倉時代の13世紀に、信楽焼は鎌倉時代後半に開かれた。一方、備前焼は5世紀から続く^{おくすえき}邑久の須恵器の系譜を引き、平安時代末期から鎌倉時代初頭に備前市およびその周辺に移動したのである。また、瀬戸焼では猿投窯の伝統を受け継ぎ、10世紀後半には瀬戸市南部において施釉陶器を生産したのである。

茶陶の一大ブランドであり後にやきものの代名詞「せともの」となった瀬戸の窯垣の小径、近代主力生産品の土管や焼酎瓶が再利用された土管坂がある常滑のやきもの散歩道、おどけた表情のためきたちが出迎える信楽、日本海側に広く流通し福井城にも供給された日本三大瓦のひとつ越前の赤瓦、堅牢な焼き締めを生かし、未来永劫に教育を続けられるようにと瓦に利用した旧閑谷学校がある備前、現存最古の登窯である「丹波立杭登窯」は地域が一体となり大修復と窯焚きが復活するなど六古窯には窯の火を絶やすことなく続く伝統を、世紀を超えて支え続ける情熱を感じられる。

◆自然を生かす窯業のふるさと

六古窯の産地は良質の「土」に始まる。山中で採れる陶土や古琵琶湖層・瀬戸陶土層の蛙目粘土、木節粘土、そして田土（ヒヨセ粘土）などで、これらをブレンドして使用している。陶工たちは大地がはぐくんできた「土」を数年かけて子どものように育てるのだ。

往時をしのばせる山々や丘陵の自然な傾斜を利用した数々の窯跡。50mを超える窯跡を有する国指定史跡「備前陶器窯跡」等がまちを取り囲むようにある。今も窯のふもとには工房があり、赤煉瓦や土管を積み上げた煙突が次々と現れる。それらに続くように住居を兼ねたギャラリーが軒を連ねているが、細く緩やかな坂道を上り下りしながら迷い込むような路地に入ると古い土塀に焼き物の破片や窯道具やごつごつとした古い窯の破片が埋められていたり、窯焚きに使う大量の薪が積み上げられていたりする。薪は轟々と炎となり陶工の顔を火照らすのであろうと思いをはせる。

また、神社の入り口でそぞろ歩く人々を見守っている陶製の狛犬や陶器で装飾された橋など、いかにも窯業のまちならではの風情を醸し出し、ロマンを感じる。六古窯の営みは、やきものの色合いがそのままセピア調の街並みの趣となっている。



びぜんとうきかまあと いんべみなみおおがまあと
備前陶器窯跡（伊部 南 大窯跡）



立ち並ぶ煉瓦の煙突



こまいぬ
まちを見守る陶製狛犬

◆やきものに恋してしまうまち

高温で長時間焼き上げる器たちは堅牢で割れにくく、使用される土や製作、焼成技法などさまざまな条件により、作品の質感や色、窯変などは異なり一つとして同じものはできないといわれる。こうした微妙な違いを生み出すやきものではあるが、それを景色として楽しむ大らかさが日本人の文化であろう。景色に溶け込むように並べられたやきものは千差万別。人の心と同じである。豪快で無骨な常滑焼や越前焼、明るく健康的な信楽焼に質朴で釉流れの美しい丹波焼、堅牢で堂々とした備前焼、そして唯一釉が掛けられた優雅さと逞しさを兼ね備える瀬戸焼と、六古窯の名で親しまれたやきものは、最も日本らしいやきものとして多くの人々の心を取りこにってしまう。

室町時代後期、わび茶の祖とされる村田珠光が、茶人としての心のあり方や美意識を説いた。15世紀前半には唐物茶壺の価値が高まり、その影響をうけて和物茶壺の生産が始まる。この頃から『わび・さび』の理念の基に、茶の湯は作法とともに道具使いなどにおいて大きな変革が行われた。それに伴い茶の湯の道具、茶陶の生産が活発化した。茶の湯により連綿と受け継がれてきた美意識は、日本人の自然なものへの愛着の現れであり、素朴で素材を生かそうとする控えめな風合いの茶器や食器は名将や茶人、食通に愛されてきた。

土と炎によって生み出され、人々の生活をささえ続けた「うつわ」には、それを享受した人々の、豊かで生き生きとした生命力が宿り、躍動感にあふれている。これらの地域では土肌の味わいと流れる施釉・自然釉の美しさをもつ陶器の存在を通して、時代をたくましく生き抜いてきた人々と大地のエネルギーを五感で感じ取ることができる。

◆伝統が息づくやきもののまちは心の原点 —そうだ 陶郷、行こう。—

六古窯の各地域では自然と人間とを大きな視野で捉えている。窯業は地域の伝統産業として精神的支柱となり、各地の陶芸村や陶芸の里、陶芸センターなどでは、独特の景観のなかで技術と伝統の継承が行われている。それぞれの特色を活かして原点回帰するとともに新しい試みを続けている。古陶ブームと共に伝統技術を復興したつくり手たちが活躍するようになる。信楽ではその技術に注目した岡本太郎氏の太陽の塔の裏の顔の制作をはじめとし、各地にも芸術家が頻繁に出入りし、作品制作を行うようになっており現代美術に昇華している。

また、第85回を数えた瀬戸市の「せともの祭」をはじめ、各産地で行われる陶器市は、海外からも多くの人が訪れる有数のイベントとなっている。店頭に並べられた陶器はさながらまちなかのミュージアムとなり、来訪者は焼き物の肌触りを味わい、使い込むほど味が出る六古窯の陶器を求め、旅情を楽しめる。

六古窯は、各々で育まれた伝統や製作技術とともに、さりげなくそしてほのぼのと来訪者を出迎える街並みとやきものが日本人のおもてなしの心を表している。



越前焼

瀬戸焼
古瀬戸瓶子

常滑焼



信楽焼



丹波立杭焼



備前焼

海揚り緋襷鶴首徳利

ストーリーの構成文化財一覧表（越前町）

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
1-1	えちぜんやき 越前焼	未指定	越前焼の発祥は今から約850年前の平安代末期と言われる。上薬を使わなくても水を通さない丈夫な焼き物と言う特長から、主に水がめ(水や穀物用)や、すり鉢などの日用雑器を中心に生産された。室町時代後期には北前船によって北は北海道、南は鳥取県まで運ばれ、北陸最大の窯業産地として発展した。現在では伝統を生かした新しい作陶も試みられるとともに、越前独特のねじたて成形も継承されている。	福井県 越前町
1-2	つるぎじんじやほんでん 劔神社本殿	県有形 (建造物)	越前町織田に鎮座する劔神社は、越前焼生産を主導し、 ^{たいらむら} 平等村の ^{こうじん} 工人たちも ^{うじこ} 氏子であった。 当地域でしか見られない ^{お た づくり} 織田 造の象徴的な神社建築。	福井県 越前町
1-3	とうげいえちぜんおお 陶芸越前大がめ ね 捻じたて成形技法	県無形	平安時代より現代に伝わる、越前焼大甕の成形技法。	福井県 越前町
1-4	しんめいがたに す え き がまあと 神明ヶ谷須恵器窯跡	県史跡	越前焼以前の須恵器生産の実態を示す遺跡。窯体が覆い屋で保存されている。	福井県 越前町
1-5	えつなんがま 越南窯	未指定	燃料(薪)不足に悩んだ瀬戸の本業窯の窯元が苦心して完成させたという幻の登り窯。日本を代表する陶芸家である、瀬戸の加藤唐九郎氏の指導により再現したもの。	福井県 越前町
1-6	つるぎじんじやもんじよ 劔神社文書	県有形 (古文書)	戦国時代、 ^{たいらむら} 平等村の上層農民が越前焼を生産していたことを物語る資料。	福井県 越前町
1-7	えちぜんかまあとぐん 越前窯跡群	町史跡	中世・近世の越前焼生産の実態を示す遺跡。町内に 200 基を越える窯跡が存在する。	福井県 越前町

1-8	きたかまやかめばか 北釜屋甕墓	町史跡	越前焼生産に従事していた職人の墳墓。甕を墓標とするなど、全国でも希有な事例。	福井県 越前町
1-9	さんきん こ 三筋壺	町有形 (考古資料)	平安時代後期の蔵骨器。越前窯のルーツが常滑窯に求められることを明らかにした資料。	福井県 越前町
1-10	えちぜんあかがわら 越前赤瓦	未指定	日本三大瓦のひとつ。越前町平等区を中心に生産され、越前焼と同じ窯で焼かれた。江戸時代以来、日本海側に広く流通。福井城・金沢城などにも供給された。	福井県 越前町
1-11	えちぜんがわら 越前瓦	未指定	明治時代以降、赤瓦に代わって普及した銀鼠色の瓦。耐寒・耐久性に優れている。現在の越前の伝統建築はほぼ銀鼠色の越前瓦で統一され、特色ある景観をつくりだしている。	福井県 越前町

(※ 1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※ 2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

(※ 3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

(※ 4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。

ストーリーの構成文化財一覧表（瀬戸市）

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
2-1	とうど けいしゃ 陶土・珪砂採掘場	未指定	主に木節粘土や蛙目粘土が産出される鉱山で、その風景は見る人を魅了する圧巻の風景である。	愛知県 瀬戸市
2-2	ひろく て ごうかまあと 広久手第 30号窯跡	市指定史跡	瀬戸市域ではじめて灰釉陶器生産が行われた平安時代の窯跡。瀬戸窯最古段階の窯跡。	愛知県 瀬戸市
2-3	せ と かまあと 瀬戸窯跡 こな が そ とう き かまあと 小長曾陶器窯跡	国史跡	室町時代の古瀬戸を生産した赤津の窯跡で、その 300 年後に、尾張藩主の命により窯炉が再利用され、茶陶生産が行われた。	愛知県 瀬戸市
2-4	せ と かまあと 瀬戸窯跡 へいじ とう き かまあと 瓶子陶器窯跡	国史跡	近世赤津村の窯跡。尾張藩士の名が書かれた陶札が出土しており、茶陶の注文生産が行われたことで知られる。	愛知県 瀬戸市
2-5	とうせいこまいぬ 陶製狛犬	国重文 (工芸品)	創建 771 年、式内社である深川神社に伝わる陶製の狛犬。古瀬戸生産の創始者といわれる加藤四郎左衛門景正作と伝えられる。	愛知県 瀬戸市
2-6	こ せ と へいし 古瀬戸瓶子	市指定 (工芸品)	鎌倉時代中期、古瀬戸生産の前期に生産されたもので、武家の都である鎌倉に集中して運ばれた製品のうちの代表的な器種。	愛知県 瀬戸市
2-7	かまがき 窯垣	未指定	瀬戸市の中心市街地周辺、近世瀬戸村域の随所でみられる。窯道具であるエンゴロ・棚板などを組み合わせて構築した擁壁や塀で、瀬戸特有の雰囲気醸し出している。	愛知県 瀬戸市
2-8	窯垣のこみち 窯垣の小径	未指定	洞の生活道路として、また、窯の燃料や製品を運ぶ産業道路として活用された道。窯垣が随所にみられる。	愛知県 瀬戸市

2-9	あかつ 赤津瓦	未指定	赤茶色が特徴的で、近代以降、特に赤津地区の窯屋のモロ（工場）などで使われた。発色の変化により、美しい様々な模様がみられる。	愛知県 瀬戸市
2-10	やきもの祭り	未指定	瀬戸を代表する祭りとして、陶祖藤四郎の遺徳を偲ぶ「せと陶祖まつり」（4 月）、磁祖加藤民吉の偉業を称える「せともの祭」（9 月）がある。	愛知県 瀬戸市

（※ 1）文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

（※ 2）指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

（※ 3）各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

（※ 4）ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。

ストーリーの構成文化財一覧表（常滑市）

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
3-1	やきもの ^{さんぽみち} の散歩道の文化的 景観	未指定	とこなめ市^{とうどきかいかん}陶磁器会館を起点にして散策することができ、他の地域には見られない^{とう}陶の風景を感じることができる。 【土管坂を始めとした焼物で作られた土留壁】 土留壁は散策地内のいたるところで見られ、常滑独自の景観を成している。これらは作爲的なものではなく、古くから焼物とともに生活してきた当時の住人たちが主要生産品である甕^{かめ}や土管等の一部を坂道や崖などの土留めに再利用してできたものである。その中でも土管坂と呼ばれる場所は、元々はただの生活路地^{せいかつろじ}にすぎなかったが、土管と焼酎瓶が積み上げられた特徴的な風景が多く^との来訪者に注目され、やきもの散歩道の代表的なスポットとなった。 【れんが煙突】 現在、残存する数は少なくなったが、戦後の最盛期にはおよそ400本が林立し、そこから絶え間なく吐き出される煙^{けむり}は当時の「焼物の町常滑」の象徴となっていた。	愛知県 常滑市
3-2	とこなめ ^{とうき} 常滑の陶器の生産用具・製品	国重要有形民俗	常滑焼の始まりといわれる平安時代末期からのもので、現在はとこなめ陶^{とう}の森資料館^{もりしりょうかん}で1,655点（生産用具1,131点、製品524点）が貴重な資料として保管されている。当時は甕^{かめ}や壺^{つぼ}などの大型の製品が大半で、その他では皿・茶碗・鉢などの日常雑器^{にちじょうざつぎ}も作られていた。	愛知県 常滑市

3-3	のぼりがま 登 窯	国重要有形民 俗	名称は陶栄窯。明治 20 年に建設され た連房式登窯で、約20度の傾斜地に 8 つの焼成室を連ねており、全国で現 存する最大規模のものである。陶栄窯 は昭和 49 年 1 月の窯出しを最後に停 止しており、現在では常滑市に唯一残 る登窯となっている。 登窯は江戸時代後期に鯉江方救、鯉 江方寿（親子）による導入がきっかけ で普及した。これによって窯詰場所の 違いによって生じる焼き加減のむら がなくなり、生産効率が上がったとい われている。	愛知県 常滑市
3-4	むけいぶんかざい 無形文化財 とこなめやき せいさくぎじゆつ 常滑焼の製作技術	市指定無形	とこなめやき 常滑焼の制作に必要な技法は様々な ものがあり、現在はヨリコ造り・ロク 口造りの技法や施釉・加飾の技法な ど、計 8 種の技法が常滑市指定無形文 化財に認定されている。	愛知県 常滑市
3-5	かごいけこよう 籠池古窯	県史跡	中世に使用されていたもので、現在は 第 3 号窯と第 9 号窯の 2 基が残ってい る。それぞれ一部を消失しているもの の、当時の形態を保っており、ここで 製作されたと思われる製品は重要な 民俗資料として陶芸研究所で所蔵さ れている。	愛知県 常滑市
3-6	たかさかこようあと 高坂古窯址	市指定史跡	とこなめとうぶ たかさかいけ おおがまいけしゅうへん 常滑東部の高坂池、大窯池周辺には 約 50 基の古窯址が集中している。そ の中で全長 14m にも達する窖窯(高坂 第14号窯)が常滑市により保存されて いる。この窖窯は 13 世紀半ばに築か れ、高さ 1m あまりの大甕が量産され ている。	愛知県 常滑市
3-7	こいえほうじゅおうけ はか 鯉江方寿翁家の墓	市指定有形	明治 18 年に鯉江方寿によって造られ た陶製の墓標である。墓の本体は土管 をモチーフにした円筒状で、土台は 鯉江家の窯で焼かれた赤レンガが、 台座は内藤陽三と寺内信一が制作し た陶板が用いられている。以後、常滑	愛知県 常滑市

			市域に陶製の墓標が多く作られるようになった。	
3-8	窯のある広場・資料館	国登録有形 (建造物)	(株)LIXILが運営する I N A X ライブミュージアム内の一施設で、1986 年に建設された。大正時代に建設された倒炎式角窯の保存を目的として整備され、現在は様々な資料とともに一般公開されている。角窯は煙道が下部にあり、火は焚口から一旦天井に上がった後に下部の煙道に向かう仕組みで焼成効率が優れている。大正から昭和にかけて活躍し、主要生産品だった土管が生産された。	愛知県 常滑市
3-9	旧 瀧田家住宅	市指定有形	やきもの散歩道散策地内にあり、かつて知多半島の廻船によって文化的交流や常滑焼の輸出等で常滑経済に貢献した船主の家屋である。当家は 1850 年頃に建てられ、現在は常滑市により復元整備され、一般公開されている。	愛知県 常滑市

(※ 1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※ 2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

(※ 3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

(※ 4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。

ストーリーの構成文化財一覧表（甲賀市）

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
4-1	しがらきやきかまあとぐん 信楽焼窯跡群	県史跡	常滑の影響を受けて信楽窯は成立し、穴窯で室町・桃山時代の茶陶生産を担い、そして江戸時代には連房式登り窯へ移行した。京焼風小物施釉陶器は江戸・東京まで流通し、戦後、火鉢は日本全国で用いられた。	滋賀県 甲賀市
4-2	しがらきやき 信楽焼	市無形 (工芸技術)	古信楽を範とした伝統的技法による作品のつくり手のみならず、信楽の伝統を活かした制作を行う芸術性の高い作家まで広くその対象としている。	滋賀県 甲賀市
4-3	こしがらき 古信楽	未指定	室町時代後期になると、茶壺、 ^{うずくまる} 蹲、 ^{おにおけみずさし} 鬼桶水指は「 ^{わび} 侘」「 ^{さび} 寂」といった自然観を備え、堺・奈良・京都などの町衆に茶陶として見出された。	滋賀県 甲賀市
4-4	え ど じ だ い し がらきやき 江戸時代の信楽焼	未指定	連房式登り窯の導入後、將軍家に献上する宇治茶を詰めるための腰白茶壺、そして一大ブランドとしての地位を築き上げていた京焼の需要を補うため、小物施釉陶器の生産へ移行した。	滋賀県 甲賀市
4-5	きんだいしがらきやきせいひん 近代信楽焼製品	未指定	近代信楽の主産品である糸取鍋や ^{ひばち} 火鉢、 ^{きしやどびん} 汽車土瓶、そして戦時中の代用陶器の試作品などの資料が現在も残されている。	滋賀県 甲賀市
4-6	おかもとたろ う さくひん 岡本太郎作品	未指定	信楽の技術に注目した岡本太郎は、信楽で大阪万博のシンボル「太陽の塔」の背面の「黒い太陽」など作品の制作を行った。太陽の塔の顔レプリカや今も人気を博している《坐ることを拒否する椅子》は信楽伝統産業会館で常設展示されている。	滋賀県 甲賀市
4-7	こ び わ こ せう 古琵琶湖層	未指定	琵琶湖は伊賀付近に約400万年前に誕生した古代湖が北上を続けて、約100万年前に現在の位置まで移動した。湖の底に溜まった土砂や動植物の残骸などが堆積したのが古琵琶湖層で、ここから採取される土はやきものに適した土として信楽・伊賀のみならず京焼でも用いられた。	滋賀県 甲賀市
4-8	しがらき 信楽たぬき	未指定	昭和26年（1951）、昭和天皇が行幸された際に、信楽たぬきを並べて奉迎した。これが報道を通じて注目されて信楽たぬきは全国的に知られるようになったといわれる。	滋賀県 甲賀市

4-9	かまもとさんさくろ 窯元散策路	未指定	信楽の町は産業景観、なかでも伝統産業によって形成される集住・産業・街区景観である。 特に長野地区の窯元散策路は窯元散策をしながら信楽焼の制作現場を見学できる体験の場を一般向けに提供し、多くの観光客に親しまれている。	滋賀県 甲賀市
4-10	しがらきひ 信楽火まつり	未指定	長野地区の窯元と従業員らが、やきものを焼く火に感謝し、また鎮火を願って長野の氏神である新宮神社で元火を受け、松明を肩に担いで、愛宕山山上の火の神を祀る愛宕神社に奉納するまつり。	滋賀県 甲賀市
4-11	とうきいち 陶器市	未指定	各産地で行われる陶器市は、海外からも多くの人が訪れる有数のイベントである。店頭に並べられた陶器はさながらまちなかのミュージアムとなり、来訪者はやきものの肌触りを味わい、使い込むほど味が出る六古窯の陶器を求める旅情を楽しめる。 〈甲賀市〉信楽陶器まつり(10月) 信楽まちなか芸術祭(10月、3年に1度)	滋賀県 甲賀市

(※1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例：国史跡、国重文(工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。

(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

ストーリーの構成文化財一覧表（丹波篠山市）

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
5-1	たんばたちくいやく 丹波立杭焼	未指定	丹波立杭焼の発祥は、平安時代末期から鎌倉時代の初めといわれている。桃山時代までは、「穴窯」が使用されていたが、慶長 16 年ごろ、朝鮮式半地上の「登窯」が導入され、同時期に取り入れられた蹴りロクロ（日本では珍しい立杭独特の左回転ロクロ）とともに、伝統技術を今日に受け継いでいる。	兵庫県 丹波篠山市
5-2	たんばやきこようあと 丹波焼古窯跡	県史跡	しとだに 四斗谷川下流域の下立杭周辺の丘陵には、丹波焼古窯跡が点在しており、その中でも摂津三田と境界を接する三本峠は丹波焼発祥の地とされる。史跡に指定された当古窯跡は源兵衛山古窯跡と呼ばれ、小字武士ケタの山麓に所在する。窯体は近年の植林等によって天井が崩壊し、長さ 18.5m の窪みの形状のみを残している。焚口部に少し窯壁が認められるとともに、そこから下方に灰原が広がり陶片が採取される。採取された陶片には甕や壺があり、器型に瓷器系の常滑焼の影響が見られる。調整は無釉・紐造・ろくろ仕上げで、自然釉を被るものもある。窯業史上、いわゆる『丹波焼』の研究において、重要な遺構である。	兵庫県 丹波篠山市
5-3	たんばたちくいのはりがま 丹波立杭 登 窯	県重要有形民俗	丹波焼の現存する最古の窯として県指定重要有形民俗文化財に指定されている上立杭の登窯は、明治 28 年に造られた。山の勾配を利用して長さ 47 メートルにわたって築かれ、9 袋の焼成室を持っている。この登窯は経年劣	兵庫県 丹波篠山市

			化などが激しく丹波立杭陶磁器協同組合が中心となり平成 26 年度より 2 か年大修復に取り組んだ。この事業には窯元をはじめ、多くのサポーターや一般の方に関わっていただき修復が完了した。	
5-4	たんばたちくいやくい さくようぎほう 丹波立杭焼 (作窯技法)	国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財 (選択)	丹波焼における連房式登窯の導入は、近世初頭の慶長年間(1596～1615)頃といわれており、この時期を境にして穴窯から登窯へ移行したものと考えられる。窯の築造にあたっては、まず適当な傾斜地が選ばれ、山の勾配が一定になるよう整地されます。場所が決まると「そだて石」が運ばれ、窯の基部が造られます。次いで型を用い、日干し煉瓦の「まくら」を「そだて」の内側から積み上げてアーチを組む。その後、窯壁の内外を山土で塗り、また、床面も塗り固める。そして、窯室の入口を造り、天井を支える柱である「さま」や薪の投入口の「あな」を設ける。また、焚き口である「火どころ」と煙の出口である「火さき」を造る。	兵庫県 丹波篠山市
5-5	こたんば 古丹波コレクション	県有形	丹波焼の創成期から江戸時代末期に至るまでの約 700 年間に 作られた代表的な品々を、年代・形・釉薬・装飾等に分類して展示している「丹波古陶館」は、江戸時代そのままの姿で妻入りの商家が立ち並ぶ河原町の一角にある。館内には、また、館蔵品のうち 312 点が「古丹波コレクション」として兵庫県指定文化財となっている。	兵庫県 丹波篠山市

ストーリーの構成文化財一覧表（備前市）

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
6-1	焼物の里の文化的景観	未指定	窯元の角地に松割木のまきが規則的に積み重ねられ乾燥させられている。松割木は窯焚きの時、煉瓦製の煙突から黒色の煙がはきだす。 伊部を囲む山々、不老山、^{ふろうざん}医王山、^{いおうざん}榎原山は流紋岩からなり、そこから生成、堆積した^{ひよせ}田土は備前焼の原料粘土として使用され、独特の味わいを器に描き出す。 伊部の旧家の中には土塀に窯の破片・陶片を練りこみ、屋根に半分にした土管をのせるものがみられる。また段差のある敷地境界やあぜ道では土留に江戸時代の土管列もみられる	岡山県備前市
6-2	備前焼の焼成技術	未指定	備前焼は登り窯や窖窯で焼成されるが、炎によりうつわの表面に描き出された独特の味わいは「窯変」と呼ばれる。現在では「まき」で焼成する産地は少なく、窯焚きは釉薬を使わない土にあわせた独特のもの。	岡山県備前市
6-3	無形文化財 備前焼の製作技術	国県重要無形 市指定無形	高度成長期「備前焼中興の祖」 ^{かねしげとう} 金重陶陽が人間国宝になり多くの作家が生まれた。現在では伊勢崎 ^{いせざき} 淳氏をはじめ5人の人間国宝を輩出した焼物の産地として知られている。岡山県、備前市でもそれぞれ無形文化財の保持者を認定する制度を運用している。	岡山県備前市
6-4	備前焼 ^{くまやま} 熊山古窯跡群	市指定史跡	伊部の北、 ^{くまやま} 熊山山中に点在する窯跡群で、鎌倉時代から室町時代のもの 17基が市指定史跡となっている。付近には名勝地の屏風岩もある。	岡山県備前市
6-5	^{びぜんとうきかまあと} 備前陶器窯跡 ^{いんべみなみおのがまあと} 「伊部南大窯跡」 ^{いんべきたおのがまあと} 「伊部北大窯跡」 ^{いんべにしおのがまあと} 「伊部西大窯跡」	国史跡	室町時代末頃に築かれ、江戸時代は岡山藩の保護と統制を受けながら、窯元六姓の制度の中で幕末まで操業された大窯群で、いずれの窯でも長大な規模をもつ複数の窯が見つっている。榎原山山麓にある伊部南大窯跡には全長 53.8m、幅 5.5m の巨大窯がある。	岡山県備前市

6-6	おばたさんちようほうじ あまつじんじゃ 小幡山長法寺・天津神社	市指定 (建造物)	備前焼の作家・窯元ゆかりの寺社で、備前焼が多く寄進されている。長法寺は報恩大師備前四十八ヶ寺のひとつで本堂は明和 7 (1770) 年に上棟。天津神社は、天正 7 (1579) 年現在地に遷宮されたもので、本殿は延宝 6 (1678) 年の改築。門・参道には備前焼瓦などが使用されている。	岡山県 備前市
6-7	こまいぬ 備前焼狛犬	県重文、市指定(工芸品) 外	備前地域では、神社の社頭で備前焼の宮獅子を見かける機会が多い。江戸時代後半から近代にかけて窯元の主力商品として多く作られ、全国へ流通した。木谷天神社に奉納された備前焼狛犬(貞享 3 (1686) 年の銘文、備前焼ミュージアム寄託) や片上宇佐八幡宮の大型(像高 1.4m、胴回り 2.5m、文政 9 (1826) 年の年号をもつ) の獅子は代表的な作品である。	岡山県 備前市
6-8	きゆうしずたにがっこう 旧 閑谷学校	国特別史跡 国宝・国重文	岡山藩主池田光政が造った日本最古の庶民のための公立学校といわれる。江戸時代前期の建物と配置がほぼそのままの形で残る。国宝の講堂や聖廟など主要な建物だけで約 5 万枚の備前焼の瓦が使用されている。元禄 13 年(1700) 銘の丸瓦も国宝に指定されている。	岡山県 備前市
6-9	備前焼まつり	未指定	備前焼のまち伊部で、毎年 10 月第 3 日曜日とその前日の土曜日開催。日本全国や海外から十数万人の方が訪れる大規模な陶器の祭となっている。	岡山県 備前市

(※ 1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※ 2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例: 国史跡、国重文(工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。

(※ 3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※ 4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧（越前町）

えちぜんやき
1-1越前焼



しんめいがたにす え き がまあと
1-4神明ヶ谷須恵器窯跡



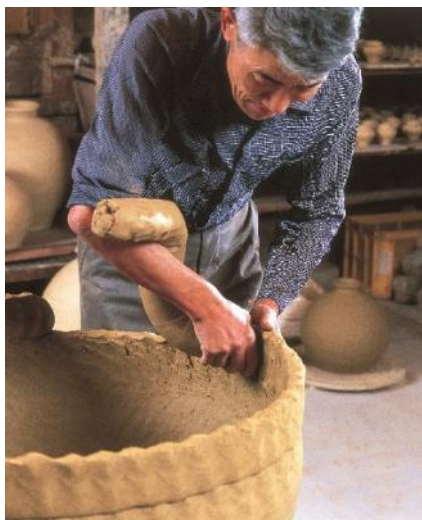
つるぎじんじやほんでん
1-2 劔神社本殿



えつなながま
1-5越南窯



とうげいえちぜんおお ね せいけいぎほう
1-3陶芸越前大がめ捻じたて成形技法



つるぎじんじゃもんじょ
1-6 劔神社文書



きたかまやかめばか
1-8北釜屋甕墓



えちぜんかまあとぐん
1-7越前窯跡群



さんきん こ
1-9三筋壺



えちぜんあかがわら
1-10越前赤 瓦



えちぜんがわら
1-11越前 瓦



構成文化財の写真一覧（瀬戸市）

2-1 陶土・珪砂採掘場



2-2 広久手第 30 号窯跡



2-3 瀬戸窯跡 小長曽陶器窯跡



2-5 陶製狛犬



2-4 瀬戸窯跡 瓶子陶器窯跡



2-6 古瀬戸瓶子



2-7 窯垣



2-8 窯垣の小径



構成文化財の写真一覧（常滑市）

3-1 やきもの^{きんぽみち}散歩道^{ぶんかてきけいかん}の文化的景観
《土管坂^{どかんざか}》



3-2 常滑^{とこなめ}の陶器^{とうき}の生産用具・製品^{せいさんようぐ せいひん}



《れんが煙突^{えんとつ}（昭和30～40年当時^{しょうわ ねんとうじ}）》



のぼりがま
3-3 登窯



えんとつ
《煙突》



ないぶたきぐち
《内部焚口》



れんりつ しょうせいしつ
《連立した焼成室》

むけいぶんかさい とこなめやき せいさくぎじゆつ
3-4 無形文化財 常滑焼の制作技術



かごいけこよう
3-5 竈池古窯



たかさかこようあと
3-6 高坂古窯址



こいえほうじゅおうけ はか
3-7 鯉江方寿翁家の墓



かま ひろば しりょうかん
3-8 窯のある広場・資料館



きゅうたき た け じゅうたく
3-9 旧 瀧田家住宅



構成文化財の写真一覧（甲賀市）

しがらきやきかまあとぐん
4-1 信楽焼窯跡群



えどじだい しがらきやき
4-4 江戸時代の信楽焼



しがらきやき わけいぶんかざい
4-2 信楽焼（無形文化財）



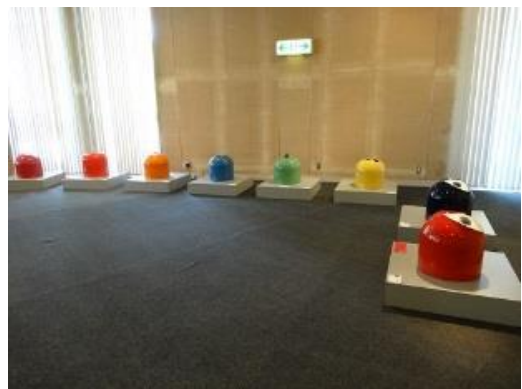
きんだいしがらきやきせいひん
4-5 近代信楽焼製品



こしがらき
4-3 古信楽



おかもとたろうさくひん
4-6 岡本太郎作品



こびねこそう
4-7古琵琶湖層



しがらきひ
4-10信楽火まつり



しがらき
4-8信楽たぬき



とうきいち
4-11陶器市



かまもとさんさくろ
4-9窯元散策路



構成文化財の写真一覧（丹波篠山市）

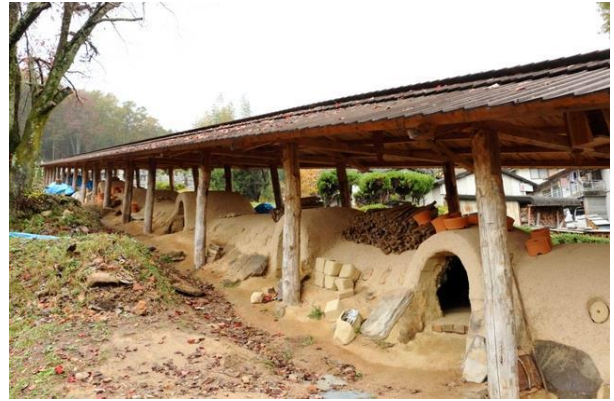
5-1 丹波立杭焼



5-2 丹波焼古窯跡



5-3 丹波立杭登窯



5-4 丹波立杭焼 (作窯技法)



5-5 古丹波コレクション



構成文化財の写真一覧 (備前市)

6-1 焼物の里の文化的景観



(土壁)

6-2 備前焼の焼成技術



(まき)

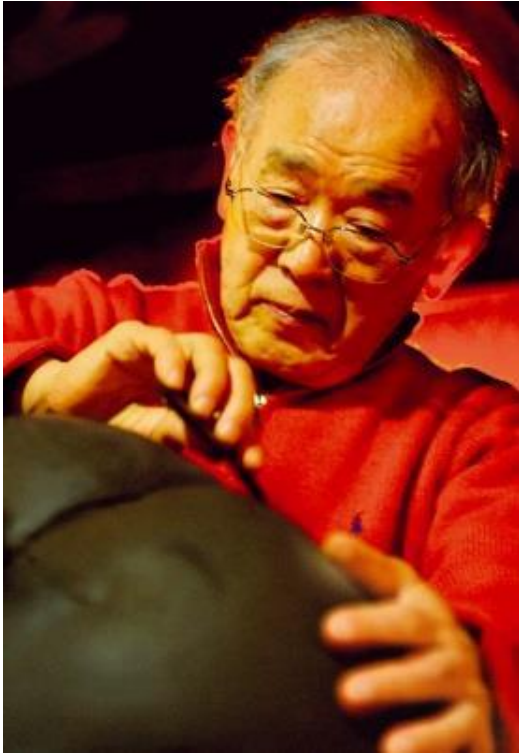


(窯焚き)



(粘土)

6-3 無形文化財 備前焼の製作技術



(写真は国指定 伊勢崎淳氏)

6-4 備前焼^{くまやま}熊山古窯跡群



6-6 ^{びぜんとうきかまあと いんべみなみおおがまあと}備前陶器窯跡「伊部南大窯跡(写真)」
^{いんべきたおおがまあと いんべにしおおがまあと}「伊部北大窯跡」「伊部西大窯跡」



6-6-1 ^{おぼたさんちやうほうじ}小幡山長法寺



6-6-2 ^{あまつじんじゃ}天津神社



6-7 備前焼こまいぬ狛犬



(木谷天神社 備前焼ミュージアム寄託)



(宇佐八幡宮備前焼狛犬)

6-9 備前焼まつり



6-8 旧きゅうしずたにがっこう関谷学校



日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
50	きっと恋する六古窯—日本生まれ日本育ちのやきもの産地—

(1) 将来像 (ビジョン)

越前(えちぜん)焼の福井県丹生郡越前町、瀬戸(せと)焼の愛知県瀬戸市、常滑(とこなめ)焼の愛知県常滑市、信楽(しがらき)焼の滋賀県甲賀市、丹波(たんば)焼の兵庫県丹波篠山市、備前(びぜん)焼の岡山県備前市の「日本六古窯」には、それぞれ世界に誇るやきものを象徴する資産群が点在しており街並みが醸し出す癒しの場となっている。

六古窯日本遺産活用協議会では、六古窯が千年の間、途切れることなく連綿と紡いできた産地の技術・文化を承継し、新たなやきものの価値を未来に繋ぐため、将来のあるべき姿として、令和4年10月に甲賀市で開催された「日本六古窯サミット2022in信楽」で産地関係者の同意を得て採択されたサミット宣言を将来像の柱に設定した。

(1) 六古窯の地として、それぞれの地域の特性を活かしながら、産地の技術・文化を未来につなげる。

(2) それぞれの地域の魅力ある多様な資源を活かしつつ、新たなチャレンジに取り組み、地域経済の循環の輪を大きくすることにより、産地の未来を持続可能なものとする。

(3) 産地間の連携と協働をさらに深め、六古窯の新たな可能性を引き出し、2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)の開催を見据え、やきもの文化の国内外への発信に取り組む。

(1)

六古窯には、それぞれの産地独自の自然と人間模様が織り成す歴史があり、連綿と紡いできた産地の技術・文化がある。産地が将来に渡って持続するため、六古窯のストーリーを各自治体・地域住民・来訪者・地域の事業者が理解し、地域の文化として未来に繋げる取り組みを自主的な活動として行う必要がある。それとともに窯業事業者が技術・文化を承継しながら、やきものに現代社会にあわせた新たな価値を付加し、時代に合わせた伝統あるやきものを作り上げていく。協議会では、各産地の特色を活かしつつ、各産地で育んできた人材・ネットワークを六古窯へつなげ、六古窯としての連携を密にし、共創・共存を実現していく。

(2)

六古窯の各市町にとって、やきものは地場産業であり、またそれを活かした観光振興が行われている。各産地では、技術の後継者不足だけでなく、原材料や燃料などの不足といった問題を抱えている。そういった問題を、産地間を超えて解決の道を探していく。

六古窯は千年の歴史の中で、常に同じものを作り続けていたわけではなく、その時代に求められるものを技術の革新を行いながら作りつづけてきた結果、窯の火が絶えることな

く続いている。陶芸技術も、各地で自然発生したものだけではなく、かつて常滑焼から派生して越前・信楽・丹波がうまれたように、現在に至るまで各産地の交流によってやきもの文化は作られてきた。

産地や属性を超えた交流を継続し、六古窯ブランドと共に地域のブランド力の向上を図り、市町域を超えた人やモノの交流を活性化させることで、文化・教育・産業などさまざまな分野で一層の交流を起し、地域経済の循環の輪を大きくしていく。

(3)

六古窯の市町は、やきもの文化の国内外への発信に取り組んでいる。直近の目標としては 2025 年大阪・関西万博でのやきものと万博をつなげる取り組みを進めており、協議会としてもそれに協力していく。そして、万博を契機として、産地間の連携と協働をさらに深め、日本国内だけでなく海外へも六古窯のやきものが知られるように、やきもの文化の国内外への発信を進めていく。

以上の六古窯サミットで採択された将来のあるべき姿を柱とし、六古窯として 6 市町が協力して日本生まれ日本育ちの、生粋のやきもの産地の姿を継承するため、地域活性化の取り組みを行う。

(2) 地域活性化計画における目標

※各目標に対し、複数の指標を設定可

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①－A：6 市町の主要文化施設の来訪者数（人）

年度	実績			目標		
	2020	2021	2022	2023	2024	2025
数値	140,526	154,548	集計中	170,389	178,909	187,854
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	六古窯各産地の主要文化施設の来訪者数の合計を指標として設定。2021 年度を基準とし毎年度 5% ずつの来訪者増を目指す。 主要文化施設：福井県陶芸館、瀬戸蔵ミュージアム、とこなめ陶の森 資料館、信楽伝統産業会館、丹波伝統工芸公園 立杭 陶の郷、備前焼ミュージアム					

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること

指標②－A：学習で理解を深める取り組みをした小学校数（校）

年度	実績			目標		
	2020	2021	2022	2023	2024	2025
数値	43	61	55	55	55	55

指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	6市町の小学校が学習で日本遺産のストーリーについて理解を深めた小学校数を指標として設定。(全 79 校) 2020 年度はコロナ禍のため実施できず、2021 年度はコロナ禍のため本来は別の学習を行っていた学校が一時的に六古窯のストーリーを行ったため増加。 ほぼ全校が参加してこれ以上の増加数が見込めない市町もあるため、2022 年度の小学校数を維持することに努める。
---------------------	--

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－A：六古窯の関係施設で行った体験料（千円）						
年度	実績			目標		
	2020	2021	2022	2023	2024	2025
数値	24,947	33,016	集計中	33,676	34,350	34,507
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	公営の六古窯関係施設で行った陶芸に関する体験料を指標として設定。2021 年度を基準として、毎年度 2% ずつの体験料増を目標とする。 六古窯関係施設：福井県陶芸館、瀬戸市新世紀工芸館、瀬戸染付工芸館、ノベルティ・こども創造館、常滑市登窯広場展示工房館、丹波伝統工芸公園 陶の郷 陶芸教室、備前市伝統産業会館					

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－A：構成文化財が棄損滅失していない割合（%）						
年度	実績			目標		
	2020	2021	2022	2023	2024	2025
数値	100	100	100	100	100	100
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	構成文化財が棄損滅失していない割合を指標として設定。現状維持に努める。					

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－A：観光客入込み数（千人）						
年度	実績			目標		
	2020	2021	2022	2023	2024	2025
数値	9,476	10,188	集計中	11,206	12,225	13,244
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	6市町の年間観光客入込み数の合計を指標として設定。					

	各市町で設定している目標値をもとに 2025 年度に 2021 年度の 3 割増を目指す。
--	---

（３）地域活性化のための取組の概要

協議会として、将来像にも挙げた 3 つの柱を軸として 3 年間の取り組みを行っていく。

（１）各地域の特性を活かしながら産地の技術・文化を未来につなげる

千年続く六古窯の伝統技術、文化を、次の千年につなげるため、各市町が、やきもののまち、ものづくりのまちとして地域資源（歴史・文化・産業）を活かしたまちづくりを進め、歴史や文化を体感できるような取り組みを行い、観光の振興を図る。

これまで協議会では行政主体の活動が中心となっていたため、今後は地域内外のパートナーとなる人材との連携を図り、組織の輪を大きくする。小売・流通事業者、旅行事業者、交通事業者、メディア、クリエイター、教育・研究機関等多種多様なチャネルを有する国内外のパートナーとの連携・共創を図ることで、多様な興味を持つ人々が六古窯へ触れる機会を増やす。それにより産地の作り手が新たなアイデアを発揮し、技術の継承や、構成文化財をはじめとした各地の文化が継承され、未来につなげることができる。まずは、六古窯産地のキーパーソンとなる人物・組織等の洗い出しを行い、産地間ネットワーク構築のための人材発掘をするとともに、次世代人材の育成に取り組む。

それとともに、構成文化財の価値や魅力を発信し、国内外での知名度を高めていく取り組みを行う。歴史や文化を体感できるよう、各産地の構成文化財を有機的に連携させ、観光客が周遊できるように促していくことで、様々な観点から観光の振興を図る。

（２）地域経済の循環の輪を大きくする

六古窯構成 6 市町と協議会を構成する産地関係者は、各産地のやきものの振興の中で人材育成・確保に取り組んでいる。

協議会では、各産地の特性を活かしつつ、それぞれ育んできた人材・ネットワークを六古窯へつなげ、地域プレイヤーとして活動できるように取り組みを進める。その中でガイドの育成や六古窯としての体験プログラムの充実などの取り組みを行い、六古窯のストーリーを体験できる環境を整備し、観光客の受け入れ態勢を整える。六古窯のストーリーを知ってもらうことで、観光業だけでなく、窯業としての六古窯の活性化も行われる。地域経済の循環の輪を大きくしていくことで産地の未来を持続させていく。

（３）やきもの文化の国内外への発信

日本遺産「六古窯」として構成文化財の価値や魅力を発信し、国内外での知名度を高める。多様な情報媒体を活用しながら、6 市町の構成文化財の価値と魅力について、国内はもとより、海外にも積極的に発信し、各構成資産の知名度を高めることで、産地の技術・文化を未来につなげ、産地の未来を持続可能なものとする。

また、2025 年の大阪・関西万博に向けてやきものを国内外に発信するために取り組んでいる。甲賀市では近畿経済産業局からブランド磨きを支援する地域ブランド(12 ブランド)

の一つに信楽焼が選ばれたことから、近畿経済産業局と連携し、信楽焼のブランディングをすすめている他、(仮称)甲賀表現祭の実施を計画している。丹波篠山市では「丹波篠山国際博(仮称)」の実施を計画している。備前市は同じく2025年に六古窯サミットの開催を計画している。協議会では大阪・関西万博や六古窯サミット、その他の各市町独自の取り組みについて、情報を収集・共有をし、互いに連携して盛り上げていく。

(4) 実施体制

○実施主体：六古窯日本遺産活用協議会

○構成団体：福井県丹生郡越前町(商工観光課、文化財担当部署)、愛知県瀬戸市(ものづくり商業振興課、文化財担当部署)、愛知県常滑市(経済振興課、文化財担当部署)、滋賀県甲賀市(商工労政課、文化財担当部署)、兵庫県丹波篠山市(商工観光課、文化財担当部署)、岡山県備前市(文化観光課、文化財担当部署)、各市・町の陶器生産関係団体、商工会議所・商工会、観光協会等

六古窯は平成29年の日本遺産認定以前から各産地でつながりを持ってはいたが、地域が離れていることもあり、6市町が協力して事業を行うことは困難であった。本協議会は遠隔地シリアル型ではあるが、共通のストーリーを掲げることで認定前とは異なり6市町が連携してやきものを活かした地域発展のための取り組みを行うことができていく。今後も6市町の連携を深め、共同でやきもの文化の発展に努めるため、協議会を中心として活動を行っていく。

六古窯日本遺産活用協議会

- ・ 6産地の連携した取り組み
- ・ ブランド力の向上（外部団体とのタイアップ）
- ・ 普及活動（イベント参加）
- ・ 情報発信（広報物制作、HP更新）

連携

連携

民間事業者

産地間
ネットワーク



備前

備前市（事務局）
教育委員会
備前商工会議所
岡山県教育庁文化財課
岡山県産業労働部観光課

丹波

丹波篠山市
教育委員会
丹波立杭陶磁器協同組合

瀬戸

瀬戸市
教育委員会
愛知県陶磁器工業協同組合

常滑

常滑市
教育委員会
（一社）とこなめ観光協会

信楽

甲賀市
教育委員会
信楽焼振興協議会

越前

越前町
教育委員会
越前焼工業協同組合

備前

教育・研究

- ・ 市学芸員 ★
- ・ 備前焼ミュージアム（市）★

事業連携・協力

- ・ 備前焼陶友会
- ・ 備前観光協会
- ・ 窯元・作家

観光

- ・ 備前観光協会

丹波

教育・研究

- ・ 兵庫陶芸美術館
- ・ 市教育委員会 ★

事業連携・協力

- ・ 丹波立杭陶磁器協同組合 ★
- ・ 窯元

観光

- ・ （一社）丹波篠山市観光協会
- ・ 観光施設指定管理者

瀬戸

教育・研究

- ・ 愛知県陶磁器工業組合 ★
- ・ 瀬戸商工会議所
- ・ 市教育委員会 ★
- ・ 瀬戸蔵ミュージアム（市）★
- ・ 愛知県陶芸美術館（県）
- ・ 新世紀工芸館（市指定管理）
- ・ 瀬戸染付工芸館（市指定管理）
- ・ ノベルティ・こども創造館（市）★
- ・ 文化課（学芸員）★
- ・ 瀬戸市文化振興財団

事業連携・協力

- ・ 愛知県陶磁器協同組合
- ・ 愛知県陶磁器工業協同組合 ★
- ・ 瀬戸陶芸協会
- ・ 窯元・作家、商社

観光

- ・ 瀬戸市まるとミュージアム・観光協会
- ・ 瀬戸商工会議所

常滑

教育・研究

- ・ 市学芸員 ★
- ・ 県学芸員
- ・ INAXライブミュージアム学芸員
- ・ 窯元・作家

事業連携・協力

- ・ とこなめ焼協同組合
- ・ 常滑陶磁器卸商業協同組合
- ・ 窯元・作家

観光

- ・ （一社）とこなめ観光協会 ★
- ・ 観光施設指定管理者

信楽

教育・研究

- ・ 市教育委員会、市学芸員 ★
- ・ 滋賀県立陶芸の森学芸員
- ・ 信楽窯業技術試験場

事業連携・協力

- ・ 信楽焼振興協議会 ★
- ・ 信楽陶器工業協同組合
- ・ 信楽陶器卸商業協同組合
- ・ 信楽伝統産業会館
- ・ 信楽陶芸作家協会
- ・ 窯元散策路のWA
- ・ 甲賀市商工会
- ・ 窯元

観光

- ・ 信楽町観光協会

越前

教育・研究

- ・ 県学芸員
- ・ 町学芸員 ★
- ・ 越前焼工業協同組合 ★

事業連携・協力

- ・ 越前焼工業協同組合 ★
- ・ 作家

観光

- ・ （一社）越前町観光連盟
- ・ 観光施設指定管理者
（（株）HIS、
（一財）越前町公共施設管理公社）

★・・・六古窯日本遺産活用協議会の構成団体

○協議会

6 市町が連携する六古窯としての活動を主とする。

六古窯の各産地を有する 6 市町と、各市町の陶器生産関係団体、商工会議所・商工会、観光協会などで六古窯日本遺産活用協議会を構成している。

6 市町による取り組みを展開するため、協議会内では 3 部会に分けて活動を分担して進めている他、定期的な情報交換を行い、各市町独自の取り組みなどの情報共有を行っている。それらに加えて、産地間ネットワークや学芸員ネットワークを構築し、六古窯全体で活動を行う基盤を作っていく。

○行政

各市町独自の取り組みについて、産業、観光、文化財などの部署が連携して取り組みを行っている。施設・環境の整備は行政が主体となって取り組みを行っている。その他、学芸員ネットワークなどを通じて、研究・教育普及などを効率的に進めていく。

○事業連携・協力

各産地では行政とやきもの業界が連携して、やきものの発展事業や人材育成などの活用を行っている。観光事業については、観光協会などの外部とも民間事業者との案件などを通じて連携を行っている。今後は産地間ネットワークの構築などによって、産地間・異業種間のさらなる連携を活発化させていく。

○民間事業者

飲料業界や、華道・茶道といった伝統文化などの産地外の民間企業と、やきものを使用した文化の普及などを連携して行っている。今後もさらなる連携業者を増やし、双方の文化の発展とともに六古窯のやきものを使用する機会の創出を広げていく。

〔人材育成・確保の方針〕

六古窯は産業の一面を持っており、各産地では、やきもの技術の継承ややきものを扱う業界人材の育成、それぞれの産地のやきもの文化を普及するための教育人材が育成され、活動が行われている。この二つは互いに影響しあい切り離せない関係にある。

○教育人材の育成・確保

協議会として、主には六古窯のストーリーを語れる人材を育成することが、六古窯全体として産業を盛り上げていくために必要なことである。そのためには、六古窯がそれぞれどのような歴史的・文化的な関りがあり、先人たちがどのようにして技術を高めてきたのかを知る必要がある。歴史的・文化的な裏付けを進めていくために、6 市町の学芸員ネットワークを構築し、研究を後押しし、その成果を地域に反映することで、六古窯のストーリーを語れる人材を育成し、観光・文化といった面で各産地のやきものの理解を深める人を増やし、産業としてのやきものが盛んになるようにしていく。

○やきもの業界人材の育成・確保

各産地で行っているやきものを扱う業界人材の育成についても協議会として協力していく。特にやきものの作り手は、業界を支える人材であるとともに、構成文化財である製作技術の担い手でもある。作り手を育てるだけでなく、育った人材が地域に定着して技術を継承していくことができるようにしなければならない。各産地それぞれの取り組みで終わることのないように、協議会として産地間交流での技術の発展などを行えるように検討

していく。

(5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

六古窯のストーリーの根幹を為すやきもの文化は各市町の産業として古くから存在している。そのため、各産地のやきものとしてはすでに自立・自走している。

これを前提とし、六古窯日本遺産活用協議会は各自で存在しているやきもの産地をつなげて好循環を生み出すことが取り組みの基本となっている。

○組織運営の継続

協議会は、6つの自治体及び各産地の関係団体が構成団体となって運営される組織であり、スケールメリットを活かして、情報発信などの共同事業を行っている。

各自治体は、構成団体その他関係者との調整といった事務局機能を担う他、地域産業である窯業の振興、観光を推進する。

その他の構成団体は、個々が日本遺産の取組を担いながら、関係の深いプレイヤーや事業者と連携し、日本遺産の民間活用や普及を推進する。

協議会としては、定期的な協議の場を設け情報収集や産地間の連携を密にし、他産地を巻き込んだ事業の支援として各産地の橋渡しを行い、また産地間ネットワークの構築を促進する。それにより、遠隔地シリアル型である中でも日本遺産のストーリーや将来像、個々の状況を随時共有して、魅力ある地域をつくり六古窯の歴史を次世代につなげていく。

○財源の安定確保

協議会の運営・共同事業に対しては、各自治体が拠出する負担金が主たる資金となっている。やきものは、各自治体にとってのアイデンティティであり、日本遺産・日本六古窯を有する地域としてブランド力を発揮していくため、今後も各自治体が負担金の財源確保に努める。

中でも、各自治体が行う「ふるさと納税」では、六古窯のやきもの製品を返礼品としてPRしており、各産地の認知度向上や業界の収益にもつながっている。今後は納税者に対しても日本遺産のストーリーや価値を発信して増収を図るだけでなく、協議会運営や各産地の構成文化財の保存活用などに収益を活用できるよう、使途指定などの仕組みを他の日本遺産を参考にしながら検討する。

また、協議会では、共同事業の成果品の一部を構成団体と協力して販売し、収益を運営に充てている。これまでには、東京2020大会記念プロジェクトで製作した記念品の杯の複製品や六古窯ロゴマーク等をあしらったマスキングテープの販売に取り組んでいる。今後は、更なる自主財源の確保を検討する。

なお、協議会の共同事業や各産地の構成文化財の保存活用においては、国などの補助金制度を随時調査し、適宜活用する。

(6) 構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

日本六古窯の構成文化財は、やきものの作品や技術だけでなく、中世から続く歴史を裏付ける史跡・文化財、やきものの産地ならではの景観・文化で構成されている。

六古窯の各産地は長いものでは千年を超える歴史を有する窯業地であり、時代の流れの中で盛衰を繰り返しながらも、窯の火を途切れさせることなく現在までつないできた伝統がある。それぞれは離れた地にあるものの、技術の伝承、製品の流通など古くから深いかわりを持っており、その地の歴史だけでなく、日本のやきものの歴史に深く関わっている。これらの歴史的遺産と共に産業としてのやきものを未来につなげていくことが、構成文化財の保存・活用に深く関わってくる。

構成文化財の保存のためには、地域の協力が必要不可欠である。地域の人々が構成文化財について興味を持ち理解することが、連携への第一歩であり保存と活用の循環に向けて大切になってくる。

協議会としての保存と活用への取り組みに、学芸員との連携による研究・普及がある。六古窯の歴史・文化に研究による裏付けを行い、専門的にゆるぎない知識基盤を作り上げる。その情報は博物館やワークショップ、パンフレットなどによって普及させ、またガイドと共有することで地域を訪れた人へ伝えていく。次に、その知識基盤により教育部署と連携し、地域住民とくに小学生などを対象に幼少期からの地域学習へとつなげる。地域の文化に触れることにより、地域・やきものへの愛着を深め、六古窯を知る人口を増やしていく。

やきもの振興として、地域・やきものへ愛着をもつ人々によって陶器まつり等のイベントを開催することにより、地域のやきものを情報発信し、地域外の人にも六古窯のやきものを知ってもらうことができる。やきものの購買者、事業者が活性化することで、産業としてのやきものが活性化していくことになる。

知識基盤を盤石にし、地域を起点として六古窯の歴史・文化に興味・理解のある人の輪を広めていくことは、構成文化財に理解のある人々が増え、興味が高まることにつながる。これに窯業の活性化で生み出される財源を加えることで、保存・整備が行われやすくなる。そういった好循環を生み出すことで、構成文化財の保存・活用を行っていく。

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

事業名		戦略強化に向けた組織整備	
概要		協議会の組織強化に向けて、事業ごとに設置した部会を中心に、円滑な協議会の推進体制の強化。あわせて、現在は6市町の行政中心に行っている協議会の事業を民間に広げるべく、産地間ネットワークを形成し、今後さらなる組織強化を行う。	
	取組名	取組内容	実施主体
①	協議会における推進体制の強化	現在は、イベント・情報発信・戦略の部会に分かれて活動を行っているが、今後のさらなる活動のために部会の再編成も含めて協議を行い、関係者・各市町の役割分担を明確化し、各部会でまとめた案を担当者会議へ積極的に提案する。	協議会
②	産地間ネットワーク構築事業	六古窯の民間産地事業者を中心に、伝統工芸に関する多様な価値観や考え、視点を持った人たちを集め共同で事業に取り組むための産地間ネットワークを構築する。	協議会
③	六古窯学芸員ネットワークの構築	六古窯協議会での事業を行うため、各市町の連携を強固にするため、各市町の学芸員や県の学芸員と連携をとるネットワークを構築する。	協議会、各市町・各県博物館
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2020	現状把握		—
2021			—
2022			36
2023	協議会事業への協力事業者数（累計）		39
2024			42
2025			45
事業費		2023 年度：4,000 千円 2024 年度：3,000 千円 2025 年度：—	
継続に向けた事業設計		協議会が活動を続けるためには、各産地でおこなっている取り組みを他の産地と共有できるような仕組みを作り、連携していくためのネットワークを作る必要がある。産地間や学芸員のネットワークを構築し、連携していく体制をつくることで、各地で新たな取り組みへ派生したり、やきもの研究のさらなる発展につながる。また、協議会で新たな事業を行うときにこれらのつながりを生かして、効果的な活動を行っていく。	

--

(7) - 2 戦略立案

(事業番号 2 - A)

事業名		六古窯サミット in 信楽宣言文の実現		
概要		六古窯サミット in 信楽で宣言を行った 3 つの柱に沿って事業を行っていく。 六古窯を各市町の総合計画に紐づけ、それぞれの市町が取り組みを強化することで、産地間ネットワークの活性化を図る。各市町の取り組みを協議会に反映するため、各市町の連携を密とする。		
	取組名	取組内容	実施主体	
①	定期的な連絡会の開催	離れた地域にある 6 市町が定期的な会議を開催することにより六古窯全体の連携を密にし、各産地での取り組みが持続的な事業へとなるように協力体制をつくっていく。	協議会	
年度	事業評価指標		実績値・目標値	
2020	協議会での会議の開催件数 (2022 年度は認定更新のために会議増)		5 回	
2021			6 回	
2022			11 回	
2023			6 回以上	
2024			6 回以上	
2025			10 回以上	
事業費		2023 年度：-	2024 年度：-	2025 年度：-
継続に向けた事業設計		新型コロナウイルスの影響で各産地独自のイベント等の事業が軒並み中止となっていたが、2025 年には世界的祭典である大阪・関西万博が開催を予定され、各産地で万博をきっかけに盛り上げる機運が高まっている。こうした好機を活かし、六古窯全体として連携を図り、やきものを地域ブランドとして世界に発信していく。また、この取り組みを行政主導の取り組みにするのではなく、産地の持続的な発展のため、共創できるパートナーを発掘し、将来に渡って産地が持続できるよう事業を行っていく。		

(7) - 3 人材育成			
(事業番号 3 - A)			
事業名	地域プレイヤー創出事業		
概要	六古窯各産地で各やきものの活性化に取り組んでいる方々が多いが、その中で六古窯全体の取組と一緒にできる方を発掘し、地域プレイヤーとして活動できるように取り組みを進める。 また、各市町では構成文化財にもなっているやきものの技術の保存・継承に関わる人材育成を行い、産業としてやきものの存続に努める。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	地域プレイヤーの発掘	各産地の陶芸家、陶器団体への視察を通じて、各産地の現状を把握し、六古窯の認知度・協力体制を整え、六古窯人材を発掘する。	協議会
②	ガイドの育成	六古窯の各産地について、日本遺産「六古窯」を含めた各市町の魅力を語れる人材を育成する。	各市町
③	後継者育成	地場産業でもある各やきものの存続のため、各市町がそれぞれの産地に合った後継者育成の支援を行う。	各市町
④	窯業従事者支援	地場産業でもある各やきものの存続のため、各市町がそれぞれの産地に合った、窯業事業者が事業を存続していくための支援を行う。	各市町
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2020	現状把握		—
2021			—
2022			—
2023	新規地域プレイヤー数（累計）		6
2024			12
2025			18
事業費	2023 年度：7,300 千円 2024 年度：6,300 千円 2025 年度：3,300 千円		
継続に向けた事業設計	2022 年度から開始した産地間ネットワーク構築事業の現地視察を活かして、各産地の六古窯事業に興味のある人材を協議会の取り組みに巻き込んで、六古窯人材として育成する。		

(7) - 4 整備			
(事業番号 4 - A)			
事業名		施設受入環境整備の強化	
概要		日本遺産拠点施設等で施設の受け入れ環境を整備し、発信拠点の強化に努める。	
	取組名	取組内容	実施主体
①	日本遺産拠点施設等の整備	日本遺産拠点施設で、六古窯の PR ブースを増やし、構成文化財の解説やパンフレット、案内板を設置するなど、施設・構成文化財の受け入れ環境を整備する。わかりやすい解説を意識した解説・案内の設置のための調査研究を進める。	各市町
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2020	施設整備件数 (3 年累計)		
2021			
2022			4 件
2023	施設整備件数 (3 年累計)		1 件以上
2024			2 件以上
2025			6 件以上
事業費		2023 年度 : 300 千円 2024 年度 : 300 千円 2025 年度 : 300 千円	
継続に向けた事業設計		六古窯構成 6 市町に属する日本遺産拠点施設と協力しながら、受入環境の整備を行ったり、学芸員との連携によりわかりやすい解説や最新の調査研究の内容を反映させた解説を作成するための調査研究を行う体制づくりをしていく。	

(7) - 5 観光事業化			
(事業番号 5 - A)			
事業名		構成文化財・ストーリーを体験する観光事業の支援	
概要		六古窯の知名度を上げ、六古窯の各産地のやきものについても知ってもらうための取り組みを行う。各産地のやきもののブランドを国内外に売り出すため、民間事業者が観光事業を創出・充実させるための支援を行う。	
	取組名	取組内容	実施主体
①	六古窯オリジナルグッズの作成と販売	六古窯オリジナルのグッズを作成し、六古窯の知名度を上げるとともに各産地に興味をもってもらうきっかけとする。売り上げを協議会の財源の一部とする。	協議会・各市町の事業所

②	六古窯の体験プログラムの充実	六古窯のストーリーを体験できるようなプログラムを充実させる。新規のプログラムを創出したり、既存のプログラムのさらなる充実に向けて、資料の提供や研修等を行えるような実施体制を作る。	各市町
③	陶器まつりの継続	各市町で行っている陶器まつりについて、今後も継続して開催し、新たな顧客層の開拓や、伝統工芸品の振興、魅力ある観光地づくりを推進する。	各市町
年度		事業評価指標	実績値・目標値
2020		体験プログラム数（3年累計）	
2021			
2022			6件
2023		体験プログラム数（累計）	12件
2024			15件
2025			18件
事業費		2023年度：4,000千円　2024年度：3,000千円　2025年度：100千円	
継続に向けた事業設計		構成文化財・ストーリーを体験する観光事業の創出の一環として、産地間ネットワークの構築を行っている。産地間ネットワークにより、観光をはじめとしたさまざまな事業や交流が生まれるが、その中で日本遺産「六古窯」の知名度をさらに上げていく必要がある。オリジナルグッズの作成や、プログラムの充実を継続的に進めていくため、六古窯で協力していく。	

(7) - 6 普及啓発			
(事業番号6-A)			
事業名	普及啓発事業		
概要	各産地で取り組んでいる普及啓発活動を継続し、協議会としてはさらなる六古窯の連携・普及に努める。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	六古窯サミットin備前	日本遺産認定以前から開催されており、六古窯の6市町で情報交換・活動報告を行っている。令和4年度は信楽で行われ、令和7年度に備前市で開催が予定されている。開催地備前だけでなく、六古窯の各地で協力しPRを行う。	協議会・各市町

②	大阪・関西万博を契機としたやきものの普及啓発	大阪・関西万博に向けて、各市町では事業が計画されている。協議会では各市町独自の取り組みについて、情報を収集・共有をし、互いに連携して、六古窯の各地域内外へ向けてのPRを行う。	協議会
③	小学校への教育普及	各産地の小学校で、地元のやきもの学習とともに日本遺産のストーリーを伝えていく。 六古窯の産地の小学生が作成した作品を展示し、それを通じた産地間交流を図る。	各市町・学校
④	産地間協力の推進	「陶のまち瀬戸のお雛めぐり」などの各市町のイベントに六古窯の他の産地から協力して出品し、イベントを盛り上げるとともに、六古窯の他の産地のことも知ってもらう。また、その協力体制を強固なものとするため連携を深める。	民間事業者
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2020	学習で理解を深める取り組みをした小学校数 (2020年度はコロナ禍のため実施できず、2021年度はコロナ禍のため本来は別の学習を行っていた学校が一時的に六古窯のストーリーを行ったため増加)		43
2021			61
2022			55
2023			55
2024			55
2025			55
事業費	2023年度：300千円 2024年度：600千円 2025年度：400千円		
継続に向けた事業設計	六古窯として、認定前から続けられている六古窯サミットを開催したり、万博といった大きなイベントを契機として、普及啓発活動を行う。それとともに、これまで各産地で行われてきたやきものイベントに六古窯として協力しあう体制を作り、継続的にイベントの盛り上げに協力し六古窯や他産地についての普及活動を行う。		

(7) - 7 情報編集・発信	
(事業番号7-A)	
事業名	日本遺産「六古窯」情報発信事業
概要	日本遺産「六古窯」の情報を発信するとともに、各産地の情報発信を行う。

	取組名	取組内容	実施主体
①	「旅する、千年、六古窯」公式 HP 等の充実	六古窯公式の HP や SNS 等の情報発信をさらに充実させ、六古窯のストーリーの周知をはかる。	協議会
②	情報発信の連携	法人パートナー、地域プレイヤー、その他事業者と協議会との相互の情報発信の連携を強化する	協議会、関係事業者等
③	六古窯サミット・万博への情報発信	六古窯サミット・万博を契機として、地域内外に六古窯のPRを行う	協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2020	公式 HP 「旅する、千年、六古窯」閲覧者数		111,348
2021			114,805
2022			集計中
2023			115,000
2024			115,500
2025			116,000
事業費	2023 年度：500 千円 2024 年度：500 千円 2025 年度：500 千円		
継続に向けた事業設計	公式 HP の充実に努め、各産地のイベント等の最新情報や、構成文化財などの周遊・体験に関わる情報にアクセスしやすくする。 各事業所と連携して情報発信の連携を強化する。		